

「本土決戦」の教材化にむけて

伊勢原高校 香川 芳文

一 はじめに

一九四五年四月頃から、アメリカ軍による日本本土への上陸攻撃に備えて、日本の各地で本土決戦に向けての本格的な準備が始められた。これにより、戦争は最終局面へと突き進んでいったが、その実態は意外なほど明らかにされておらず、また、それを反映してか教科書にもあまり記述されていない。敗戦時に多くの関係文書が処分されたこと、実際に戦闘が行われなかったため戦記等でも多くは語られなかったことなどが、その理由として考えられる。

筆者も以前は、本土決戦についての知識は全く無く、軍事的なものに対しての興味も無かった。しかし、地元の戦時中のことを調べている先輩教員から、筆者の住まう神奈川県西部の足柄平野近くで本土決戦について知っている者はないかと尋ねられ、たまたま、父に尋ねたところ、本土決戦期の色々なことを聞くことができた。これが、きっかけとなり、地元で本土決戦についての証言や資料を集めていくうちに、その全貌が明らかとなったとまでは到底いえないが、その断片を繋ぎあわせ地元での本土決戦準備の実態が自分なりにイメージ化できるようになった。また、芋づる式に証言や資料が出てくる楽しさや、これ以上判明しないという壁にもぶつかる経験も勿論あった。

以上の筆者の体験は、言うまでもなく、自分で資料を集め、資料批判をし、それを自分なりに構成する歴史研究の基礎的な作業であ

る。このような力を社会科教育や歴史教育で育てることが、新指導要領でいわれる「生きる力」を育てることにつながるのではないかと考える。その教材の一つとして、各地域で調べることが可能な本土決戦をテーマにすることが有効ではないかと考える。

そこで、本稿では、筆者が神奈川県西部の足柄平野においてどのように本土決戦について調べていったのか、その方法を中心に紹介し、これから本土決戦を教材化するための準備としたい。

二 身近な証言からのアプローチ

(1) 父の証言

父は、当時国民学校の上級生であったが、当時のことをよく記憶していた。その話をまとめると以下の通りである。

①自宅近くのお堂に、三〇人位の兵隊が駐留し、小隊長の少尉は鳥取の人で自宅の一室で寝起きしていた。食事は炊事兵が作っており、赤いコーリヤンの飯も多かった。兵士はドラム缶風呂に少尉は自宅の風呂を使った。

②途中、部隊が替わり、最後には重機関銃を持ってきて、お堂にすえていた。また、小学校近くの民家の竹藪には、戦車もあった。

③大井松田インター近くの丘陵部では敗戦ちかくまで陣地づくりがされて、戦後、そこから壕の補強に使っていた材木を取ってきて利用した。また、宿泊施設の「いこいの村あしがら」近くの浅間山には、大きな陣地が今でも残っており、危険なので町がその周りをフェンスで囲っている。

まとまった資料の無いなかで、証言は貴重な資料となるが、人間

の記憶には勿論不確かな部分もあり、他の資料で裏付けを取ったり、他の証言と付き合わせたり、陣地の場所などについては現地に行ってみる必要がある。

(2) 資料による裏付け

駐留した部隊名、その時期については、本部が置かれた自宅近くの小学校の沿革史の記事により確認できた。

「山田国民学校沿革史」(「大井町史」資料編 所収)には、

昭和二〇年度

四月二十四日 軍隊(突第一〇一三四部隊寺谷英太郎部隊)二第三

教室第四教室ヲ貸与、全校二部授業トナシ疎開児童

ヲコトハル

五月二十八日 本日ヨリ軍隊(顯第一二三八五部隊、隊長陸軍大尉

増田忠久)へ宿舍トシテ、第三第四教室ヲ貸与セリ

八月 二日 顯第一二三八五部隊全部引上ゲタリ、

八月 九日 本日ヨリ、断部隊二例ノ二教室ヲ貸与セリ

とある。

資料中の「突」「顯」「断」とは、日本軍が部隊を文字の符号により、表したものである。本土決戦のために神奈川県に配置された第五三軍が「断」、その配下で県西部を担当した第八四師団が「突」、また戦車連隊が「顯」と表された。

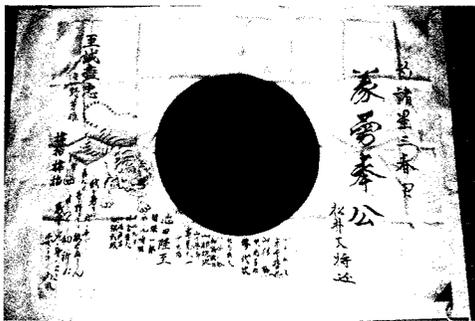
資料中の軍人名、部隊番号を合わせて考察すると、山田国民学校には、まず、第八四師団の第二〇〇連隊の第三大隊が駐留し、次に戦車隊、敗戦まぢかにはまた別の部隊が駐留したことがわかり、証言が裏付けられるとともに、記憶ではハッキリしない駐留時期を確定することができる。

本土決戦末期は物資も装備も不足し、戦車など配置できなかったと考えがちであるが、場所によってはこのような部隊が配置されたことがわかる。本気で、この地で戦おうとしていたことが、これらの資料から実感できる。

また、第二〇〇連隊が鳥取で編成された部隊であるので、自宅の小隊長が鳥取出身であることにも合致する。

(3) モノによる裏付け

筆者個人の関心としては、自宅に駐留した小隊長についても少し知りたいという気持ちがあったが、その正確な名前がわからず、迫ることができなかった。しかし、証言を聞いて三年位後に、伯父が出征するために準備していた日章旗を見せてもらったところ、そこには、自宅に駐留していた兵士の署名があり、小隊長の名前が明らかになった。それを、調査に協力していただいた鳥取の第二〇〇連隊の元兵士の方に、照会したところ、住所を調べ連絡を取っていただいた。その方は、敗戦の翌年、亡くなられていた。第二〇〇連隊第三大隊第一一中隊第二小隊長の少尉で、敗戦直前、千葉の習志野の歩兵学校で毒ガスの研修を受けていたことから戦後その影響もあり病死されたのではないかとということであった。その裏付けは得ることができていないが、日章旗から自宅に駐留した小隊長にたどり着くことができ



た。偶然的な要素も大きいですが、調べようとする、何時の日か芋づる式にそこにたどり着くことも出来るのである。

(4) 現地に行く

本土決戦がこの地で行われようとしていたことを、物語るものとして当時の陣地の跡がある。父に案内してもらい、補強の木材を戦後取りに行ったという場所を尋ねてみたが、木々の間に入り口らしき所があるのみで、ハッキリはしなかった。

一方、大体の位置を聞いて、尋ねた浅間山の陣地は良く残っていた。「いいこの村あしがら」付近では敗戦後、兵器の処理が行われたそう。また、そこから浅間山に登る真っ直ぐの道は、戦時中資材を運ぶために整備されたという他の兵士や住民からの証言もあった。陣地の場所は、その近くで農作業をしている人に聞いてようやくわかった。陣地の場所は、当然分かりにくい所にあるので、地元の人々の案内がないとたどり着けない場合が多い。また、その際、戦時中の様子を合わせて聞くことができる場合もある。

陣地は山の斜面を垂直に切り込み、その左壁下部に人が立って歩けるほどの下に向かうトンネルが掘られていた。そのトンネルは少し先で左に曲がっている。また、近くには一辺約一メートルの縦穴が深く掘られていた。何のための陣地かは判明しないが、第二〇〇連隊の本部陣地



がこの辺りに作られたという証言もありそれに関係する陣地とも考えられる。

また、陣地の北東には第五三軍の本部が置かれた伊勢原方面、大山、東には横浜のランドマーク、南東には大磯、平塚方面の湘南平、西側の木々の間には富士山がのぞまれ、作戦上重要な場所ではなかったかと想像された。陣地のある現地を尋ねることで、視覚的な面でも色々な情報に出会うことができる。

以上が、筆者の自宅を中心に本土決戦期の状況について調べることができた内容である。父の証言という点からスタートして、当地に駐留した鳥取の兵士のこと、駐留した部隊が作った陣地の跡、そして戦車まで来ていたことなど、本土決戦期の様子が立体化し、将にここを戦場として、決戦に臨もうとしていた当時の様子が実感できました。

本土決戦に向けてのこのような状況は、日本各地であったはずで、各地域で戦争の行き着くところを、身近な場所を材料として実感して学習できる良い教材になるのではないかと考える。

三 地域からの視点で迫る「本土決戦」―神奈川県西部の例―

つぎに、本土決戦準備期に足柄平野に駐留した本土決戦部隊、地域住民の様子について、筆者が調べるにあたって使用した資料、その結果であったことについて簡単に紹介したい。

(1) 本土決戦部隊の配置、兵士の状況

まず、その地に駐留した部隊名を調べておく必要がある。日本陸軍部隊関係の一般書により、師団名、連隊名までは容易にしらべることが出来る。しかし、連隊下の大隊の配置状況は不明である。防

衛庁防衛研究所の図書館で、作戦計画がないか調べたが、敗戦時処理されたのか、あまり資料は残っていない。

そこで、調査方法としては、地元の証言、学校の沿革史からわかる部隊長名を師団の将校表と照合するとことで、部隊を確定し駐留場所、期間を調べることができた。師団の将校表はなかなか手に入らないが、鳥取の第八師団本部の元将校の方のご協力により入手できた。防衛研究所図書館にも一部残っているものもある。また、学校沿革史の中には、四五年の部分が抜けているものも多い。敗戦後、軍の命令で削除された可能性もあり、資料の残存状態から当時の様子を知ることができる。

また、防衛庁防衛研究所図書館には、何枚かの「築城施設、兵力、火砲の配置図」が残っている。第五三軍や第八師団が、どこに陣地を作り、部隊を置き、大砲を置くかを地図に書き込んだものである。この地図から、足柄平野での部隊の配置を俯瞰することができると、地図で部隊や大砲が配置された場所に行き、それをもとに地域で聞き取り調査を行うと、当時の陣地跡が発見できたり、駐留した部隊の様子を聞くことができる場合がある。

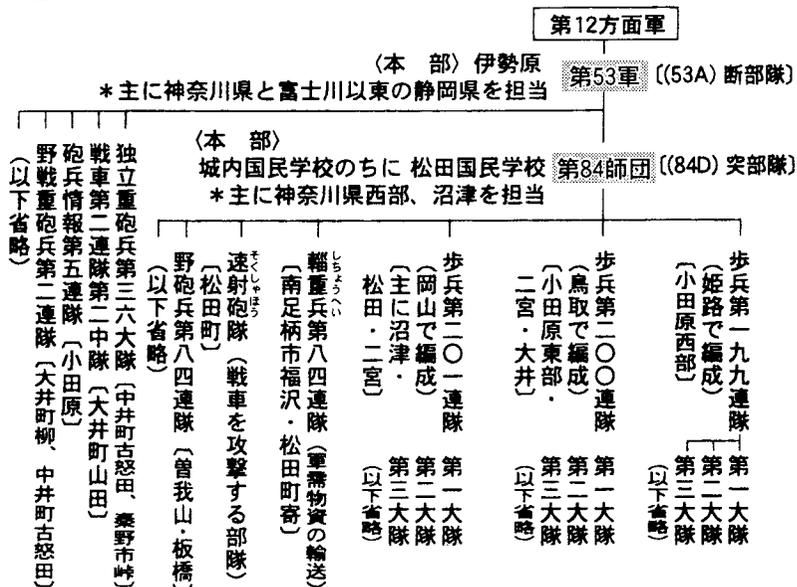
駐留した部隊の部隊史を調べることも有効である。『鳥取総合連隊史』の中の「歩兵二百連隊史」には、詳しい記述があり、またその著者の住所が載せられていたので、連絡を取り、その方の証言を聞くことができ、また、知り合いの方を紹介していただいたり、多くの資料提供もしていただいた。本当に色々な方にご協力いただきながら、足柄平野に駐留した部隊の様子が少し明らかになった。

第八師団(突)は、一九四五年四月頃に鳥取からこの地に駐留した。師団司令部、各連隊本部が置かれた場所、時期は次の通りで

ある。

・司令部

〔足柄平野に駐留した軍隊の編制の一部〕



- 四月五日 小田原城内国民学校
- 四月九日 管理部が松田国民学校
- 四月一三日 管理部が松田国民学校
- 七月六〜一五日 小田原から松田国民学校に移る

大東亞戦争 相模湾・伊豆半島・駿河湾方面築城施設設置図〔53A〕其の二（部分）



* 国土地理院発行5万分の1の地形図に筆者が書き写した。

・歩兵第一一九連隊（姫路）—真鶴、湯河原、小田原西部、

南足柄市の丘陵地に配置

本部 芦子国民学校から、七月頃久野分教場に移動

・歩兵第二〇〇連隊（鳥取）—国府津から大井町にかけての丘陵地

本部 国府津国民学校から、山側の宝金剛寺に移動

浅間山に連隊本部陣地構築していたが途中で中止

・歩兵第二〇一連隊（岡山）—沼津、後に松田、二宮に主力移動
配置図を見るとよくわかるが、部隊配置の特徴としては、足柄平野の東西の丘陵地に連隊、重砲陣地が構築される予定であった。アメリカ軍が上陸した場合には、酒匂川河口を重砲で側射し、丘陵陣地に誘い込み戦う作戦であったことがわかる。そして、特に東側の丘陵地（浅間山、不動山付近）に火砲を重点配置し、足柄平野の北東方面の最深部（東京方面への出口）に速射砲、戦車隊を配置しているのは、酒匂川河口東側の海岸から上陸し、東京方面に侵攻するアメリカ軍を足柄平野を戦場として阻止しようという配置ではないかと考えられる。

また、七月から本部の移動が行われたが、その意味は、作戦上は第一期の陣地構築が終了した時期なので、より臨戦的に部隊が配置されたためとも、水際でアメリカ軍を迎え撃つ作戦に、日本軍の作戦が変更になったための配置変更とも考えられる。

次に、駐留した兵士の状況について簡単に述べたい。連隊、師団本部は学校、寺院などに置かれ、将校は近くの民家や空き別荘に宿泊することもあった。そのため、国民学校では教室が不足し二部授業になることもあった。一般の兵士はみかん小屋、煙草の乾燥小屋などに駐留したが、野営する場合もあった。食料は、コーリヤン、

大豆粉などで、農耕隊や漁撈隊も編成し自給自足体制で駐留していた。その主な任務は、艦砲射撃などに備えるための地下式洞窟陣地構築のための木材の伐採、製材、そして、トンネル掘りであった。

（2）地域住民の総動員

本土決戦期の地域を考える上で、軍事的な側面だけでなく、地域住民がそれにどのように関わっていったのかという視点をおさえることが重要である。住民の動きは、「市史・町史」に載る常会資料、「郷土誌」のなかの体験談などにより知ることができる。勿論地域住民への聞き取りも重要である。また、学校での動きについては、各学校の「沿革誌」「日誌」「記念誌」を調査すると良い。

部隊が駐留して少しすると、地域住民は軍の作業に動員されていた。小田原市では五月に町内会（区）を単位に一日三百名、一五日で延べ四千五百名が動員された。作業は陣地構築にかかわる木の伐採、運搬等の手伝いだった。陣地の構築自体には機密保持のためか住民は携わらなかったようだ。

部隊から地域の役所に動員要請があり、町内会毎に人数を割り当て、該当住民は決められた日に集合場所に行き、担当兵士の引率で作業場で仕事をした。また、労働力の提供以外にも、物的協力の要請もあった。四月に農耕用の灰、五月に兵器手入れのための古繊維、八月に作戦用有刺鉄線の供出の要請が町内会にあった。

また、総動員体制下の住民の組織化として、小田原市では六月一日に国民義勇隊が結成された。八月には国民義勇隊女子隊が軍の作戦会議のためのお茶の接待に出動している。

学校組織による軍のための動員も行われた。一部の国民学校の高

等科の生徒は五月より陣地構築に動員される。そして、七月初めに学徒隊が小田原市内の学校では編成されている。

現在の高校、当時の旧制中学校については、五月から六月にかけて、県内の遠方から中学生が動員され、陣地構築の手伝いに泊まり込みで動員されている。川崎中学の三年生が松田付近の陣地構築に動員され、湘南中学の二年生が国府津付近の一人用塹壕のタコツボ掘りなどの作業をしている。地元の小田原中学の生徒も六月一日に二年の二クラスが陣地構築に出動し、七月二日には学徒隊が結成されている。

地域住民や生徒がこの地域を陣地化するための作業、本土決戦準備に動員されていたようすが浮かびあがってくる。そして、国民義勇隊や学徒隊が結成され、最終的にはここを戦場として本土決戦に臨もうとする総動員体制の究極的態勢が見えてくる。まさに、沖繩戦が始まる前の沖繩の状況と重なるものがある。

四 本土決戦の教材化

本土決戦期の研究は中央レベルでは資料制約もありあまり行われていない。したがって、地域レベルで地方に残る資料を丹念に掘り起こし、証言を集め、陣地の跡を尋ねるなどの地道な作業により、本土決戦の実態、即ち、戦争の行き着くところが見えてくるのではないかと考える。体験者の高齢化が進み、関係資料も失われつつある。このような時期だからこそ、教員が出来れば生徒とともに、本土決戦という視点で地域の歴史を見直し、資料を発掘することが大切であると考ええる。

しかしながら、このような調べ学習を歴史の授業時間内でやるこ

とは到底無理である。そこで、総合的な学習の時間の中での一つのテーマにしても良いのではないかと考える。興味ある一部の生徒になつてしまいが、その成果を日本史の授業に組み入れることも可能であろうし、沖繩に修学旅行に行く場合は、地元の本土決戦期のことを事前に知っておけば、沖繩戦がより身近なものとして実感できるようなになると思う。

本土決戦へのアプローチの方法として、私の体験から、証言からスタートする方法を先に紹介したが、もう一つ、モノから追った例を紹介しよう。

本土決戦を意識し始めた頃、小田原市郷土文化館に行った際、戦時中のコーナーに、「写景図」という板が展示されていた。小田原市荻窪の防空壕にあったと書かれていた。しかしこの板には、景色のスケッチとともに「陣地名」「陣地番号」「銃番号」などの記入があり、明らかに本土決戦陣地に関する資料のように思えた。文化館の方に、この板を寄贈した荻窪の方をお聞きし、連絡を取り証言を聞くことができた。関東学院大学法学部の近くのお宅で、その方のお父さんが畑の近くの陣地から、敗戦後持ってきて保存しておいたものだそうだ。また、その時、陣地の補強に使った木材も取ってきており、それもまだご自宅に何枚か残っていた。また、近くのみかん小屋に駐留した岡山の兵士がお礼にと置いていった携帯天幕も保存していた。本土決戦を物語るモノがこれだけ揃っていたのには驚いた。またその近辺の陣地跡もご存じで案内していただいた。

すべて、こう上手く進むとは限らないが、本土決戦については、比較的情報が集め易いことを実感した。

証言からモノ・陣地跡、モノから証言・モノ・陣地跡など本土

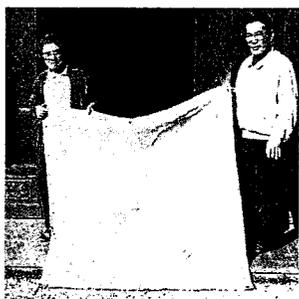
決戦については色々なアプローチが可能であると思う。

そして、このようにして得られた成果を日本史の授業に取りこむことも可能である。「洞窟式陣地」や「補強の木材」の写真を提示し、「一九四五年五月頃このような陣地が何のためにこの地で作られたのか？」という発問を導人に授業を展開することもできる。それにより、生徒は本土決戦にのぞむため新たに駐留した部隊の兵士

陣地内部に残されていた陣地名等が記された板(小田原市郷土文化館蔵)



陣地の補強に使用された板材



兵士の使用した携帯天幕を広げる

により陣地が作られたことを知り、軍の本土決戦の「決号作戦」に気づかせることができる。また、「補強の木材」は陣地構築に地域住民や学生が動員されたことを示す証拠となる。地元とそこにあるモノ、陣地を教材にすることで戦争をより実感できるものとして学習できるのではないだろうか。

また、高校では、記念誌、学校日誌を資料として、軍の作業に動員され、学徒隊へと編成されていく当時の高校生の姿を見ることが出来る。また、卒業生へ取材し、証言を聞くことも可能ではないだろうか。

参考文献

- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書本土決戦準備―関東の防衛』朝雲新聞社 一九七一年
- 大西比呂志・栗田尚弥・小風秀雅著『相模湾上陸作戦』有隣堂 一九九五年
- ―第二次大戦終結への道―
- 戦時下の小田原地方を記録する会編 『市民が語る小田原地方の戦争』 二〇〇〇年
- 香川芳文『本土決戦部隊と地域住民―戦場としての足柄平野地域―』 『小田原地方史研究』 21号 二〇〇〇年
- 戦時下の小田原地方を記録する会編 『戦争と民衆ブックレット1―総合で地域の戦争を調べよう―』 二〇〇三年